安威地域の塼について

河内 一浩

１．はじめに

ここで安威地域（註１）の塼として取り上げる資料は、茨木市の初田１号墳と高槻市の阿武山古墳の遺物である。いずれも個人が採集したもので発掘調査により出土した塼ではない。そのため、公開されることなく周知もされていない。採集遺物なので発掘調査による出土品より資料価値が劣る意見もあるが、消滅した初田１号墳や調査後に再び埋め戻されている阿武山古墳の両古墳から現在知られている遺物以外に新たに得ることができる遺物の情報は重要といえる。

そこで、今回遺物を収蔵している各機関に承諾を得、図化することができたのでここに報告するものである（註２）。

ここで取り上げる二つの塼が出土した古墳は、茨木と高槻の二市に位置するが、もとは安威とよばれる地域にあたる（図１）。安威地域とは、北摂山地から淀川へ流下する安威川が形成する沖積平野に中臣氏の祖神の天児屋根命を祀る阿為神社が鎮座する周辺である。古墳は標高 281 mの阿武山から南に伸びる尾根先端に阿武山古墳が築かれ、安威丘陵の舌状に張り出す台地上には初田１号墳が築かれている。

また、阿武山から張り出す微高地上に築かれた桑原西古墳群では石室の床に敷いた塼が見られることから、この地域に分布する塼の様相を検討することにする。

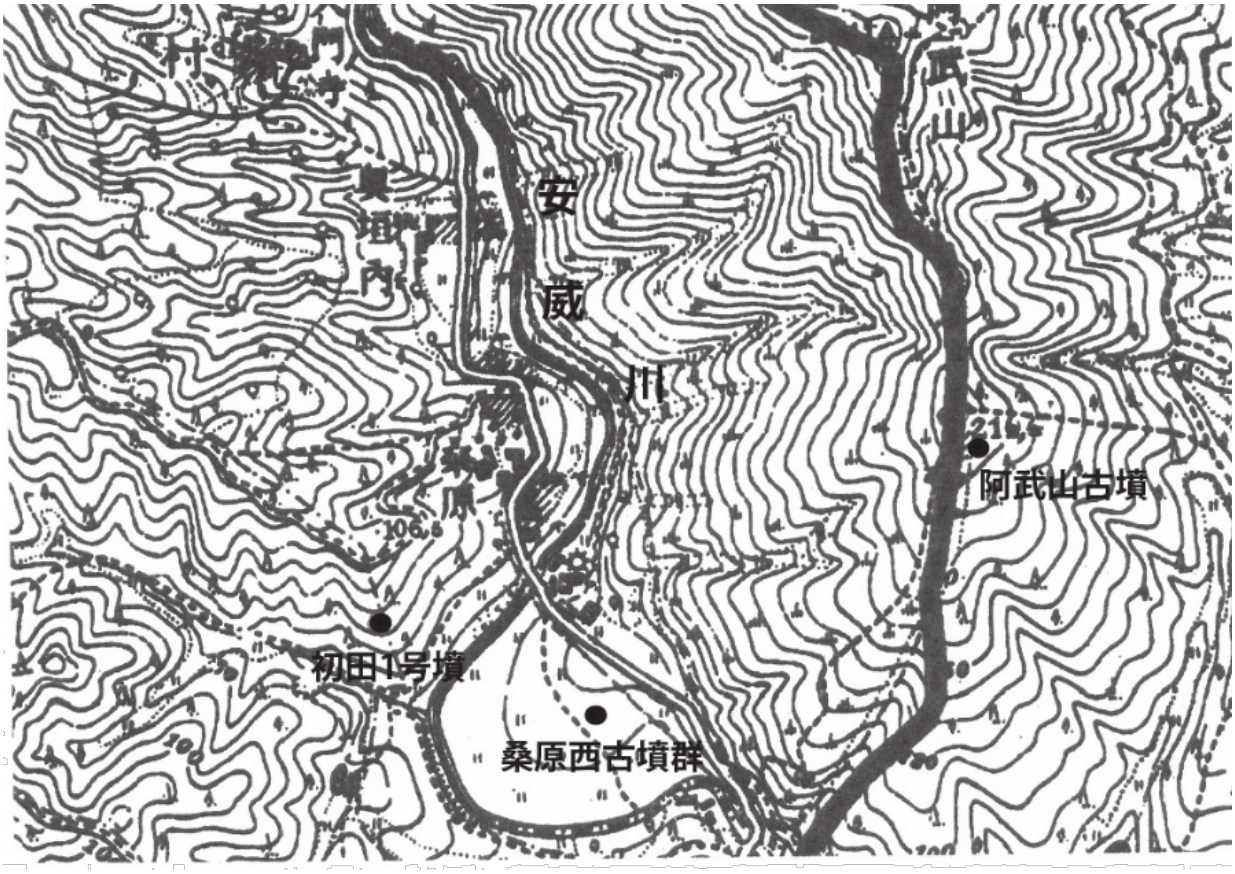

図１　安威地域の塼出土古墳分布図

２．塼について

【初田１号墳】

初田１号墳は、昭和 45 年に実施した大阪府教育委員会の調査で塼が存在することが確認され、現在大阪府教育委員会が 31 点を所蔵している。調査概要は『節・香・仙』（中井 1972）に報告があり、塼については『陶器遺跡・陶器千塚・陶器南遺跡』に 14 点が報告されている（関 2007）。

今回紹介する初田１号墳の塼は、免山篤氏が過去に採集した資料で、現在は茨木市立文化財資料館に収蔵されている（註３）。収蔵される来歴は、免山篤氏が 1994 年に寄贈されたことがわかった。免山氏が採集したのは昭和 35 年９月とあるから府の調査の 10 年前にあたる（註４）。

塼は免山氏から２回に渡り寄贈されたもので、総数 11 点である（註５）。

塼１は、二隅が残る３側面が遺存する。便宜上図２−１の右をＡ面、左をＢ面とする。Ａ面の法量は幅 24.7㎝、長さは現存で 22.2 ㎝を測り、Ｂ面は幅 23.6 ㎝、長さは現存で 21.7 ㎝を測る。横断面は台形状で厚さ 3.8 ㎝〜 4.0 を測る。明黄褐色を呈する土師質に焼成される。塼の外面は、両面とも指オサエによる整形痕の後にナデ調整を施す。側面もナデ調整による。Ｂ面に直径 1.4㎝の竹管文が押されている。

塼２は、二隅が残る３側面が遺存する。便宜上図２−２の左をＡ面、左をＢ面とする。法量幅 25.1 ㎝、長さが現存で 32㎝、厚さ 3.2 ㎝を測る。黄橙色を呈する土師質に焼成されるが一部須恵質になっている。塼の外面調整は、両面ともナデを施す。Ｂ面の左側面は、Ｂ面から３㎝幅でヘラ削りをしている。側面は４㎝の厚みなので 0.8㎝〜 1.0㎝幅で未調整部分が凸帯状に残る（写真１）。

塼３は、図３－３の左に示した部分が残存する破片であり、側面も欠損する。法量は 6.5㎝ × 6.7㎝の大きさを測る。厚みも最大で 2.2㎝であった。黄橙色を呈する土師質に焼成される。塼の外面調整はナデを施している。全体は不明であるが、格子状の線刻が認められた。

塼４は、側面をもつ破片で、便宜上図３−４の右をＡ面、左をＢ面とする。Ａ面の左は端面であり、右の破断面は側面に平行するので、塼を切断した可能性がある。法量は残存する短辺で 12.5㎝、長辺で 18.2 ㎝を測る。厚さ 3.4 ㎝を測る。灰白色を呈する土師質に焼成される。塼の外面調整は、Ａ面をヘラ削り、Ｂ面はナデ施す。側面はヘラ削りによる。

塼５は、端面が無い破片二つが接合する資料である。法量は 13㎝ × 8.5㎝の大きさで、厚さ４．０㎝を測る。灰色を呈する須恵質に焼成される。塼の外面の調整は、両面ともナデ調整を施す。図３の５の右のＡ面に３本の平行する線刻があり、左のＢ面にも２本の平行する線刻が認められる。

塼６は、側面をもつ破片で、便宜上図３の６の右をＡ面、左をＢ面とする。法量は短辺 7.4 ㎝、長辺 13 ㎝、厚さ 3.3 ㎝を測る。黒色を呈する須恵質に焼成される。塼の外面調整は、Ａ面はユビオサエの後にナデを施すが、部分的のユビオサエの凹凸が残る。Ｂ面は横方向のヘラ削りが観察できる。両端部とも幅 0.6㎝の面取りが見られた。

塼７は、隅が残る２側面が遺存する。便宜上図３−７の右をＡ面、左をＢ面とする。法量は短辺 6.5 ㎝、長辺 10.0㎝、厚さ 3.4 ㎝を測る。胎体は灰色を呈する須恵質に焼成される。Ａ面、Ｂ面、そしてＣ面とした側面には光沢のある黒褐色の釉薬がかかったような状況が観察された（写真２）。自然釉であれば、３面にわたり存在する可能性が低いからだ。塼の外面調整は、両面ともナデを施す。側面はヘラ削りを施す。

塼８は、隅が残る２側面が遺存する。便宜上図３−８の右をＡ面、左をＢ面とする。法量は短辺 6.5 ㎝、長辺 8.5㎝、厚さ 3.7 ㎝を測る。灰色を呈する須恵質に焼成される。塼の外面調整は、Ａ面は縦方向のナデを施す。Ｂ面はナデにより青海波文の当具痕を消している。Ｂ面の下辺に 0.8㎝幅の凸帯がある（写真３）。

塼９は、隅が残る２側面が遺存する。便宜上図３−９の右をＡ面、左をＢ面とする。法量幅 11.8 ㎝、長さ 20.0 ㎝、厚さ 4.0 ㎝を測る。灰色を呈する須恵質に焼成される。塼の外面調整は、Ａ面は青海波文の当具痕が残り、側面は幅 1.0㎝のナデを施す。Ｂ面は横方向のナデを施し、さらに幅 1.8㎝ 〜 2.0㎝のナデが観察された。側面はヘラ削りによる。

塼 10 は、隅が残る２側面が遺存する。便宜上図３－ 10 の右をＡ面、左をＢ面とする。法量は残存する短辺、長辺とも 10.0 ㎝を測る。厚みは

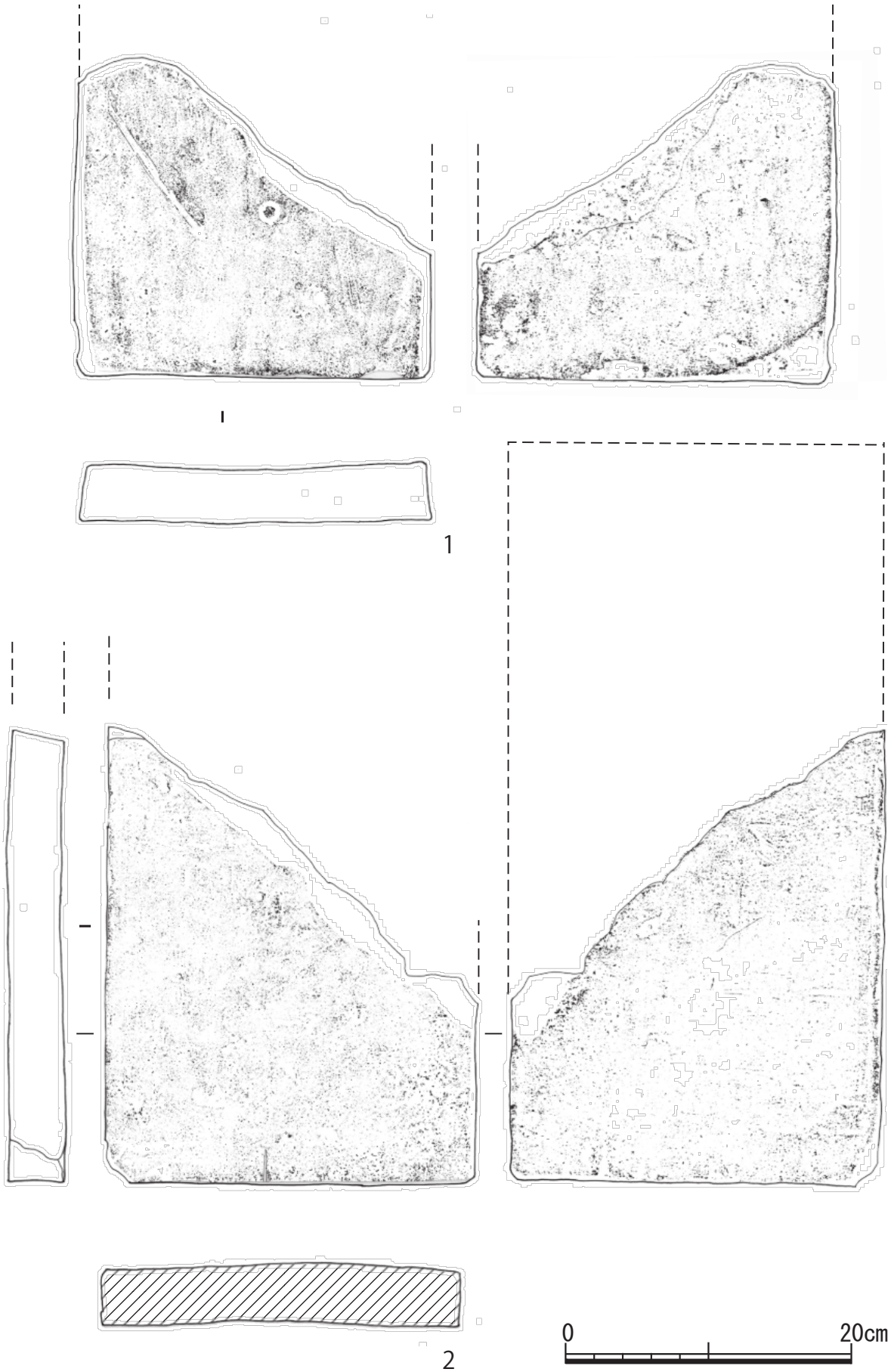

図２　初田１号墳塼（茨木市立文化財資料館蔵）

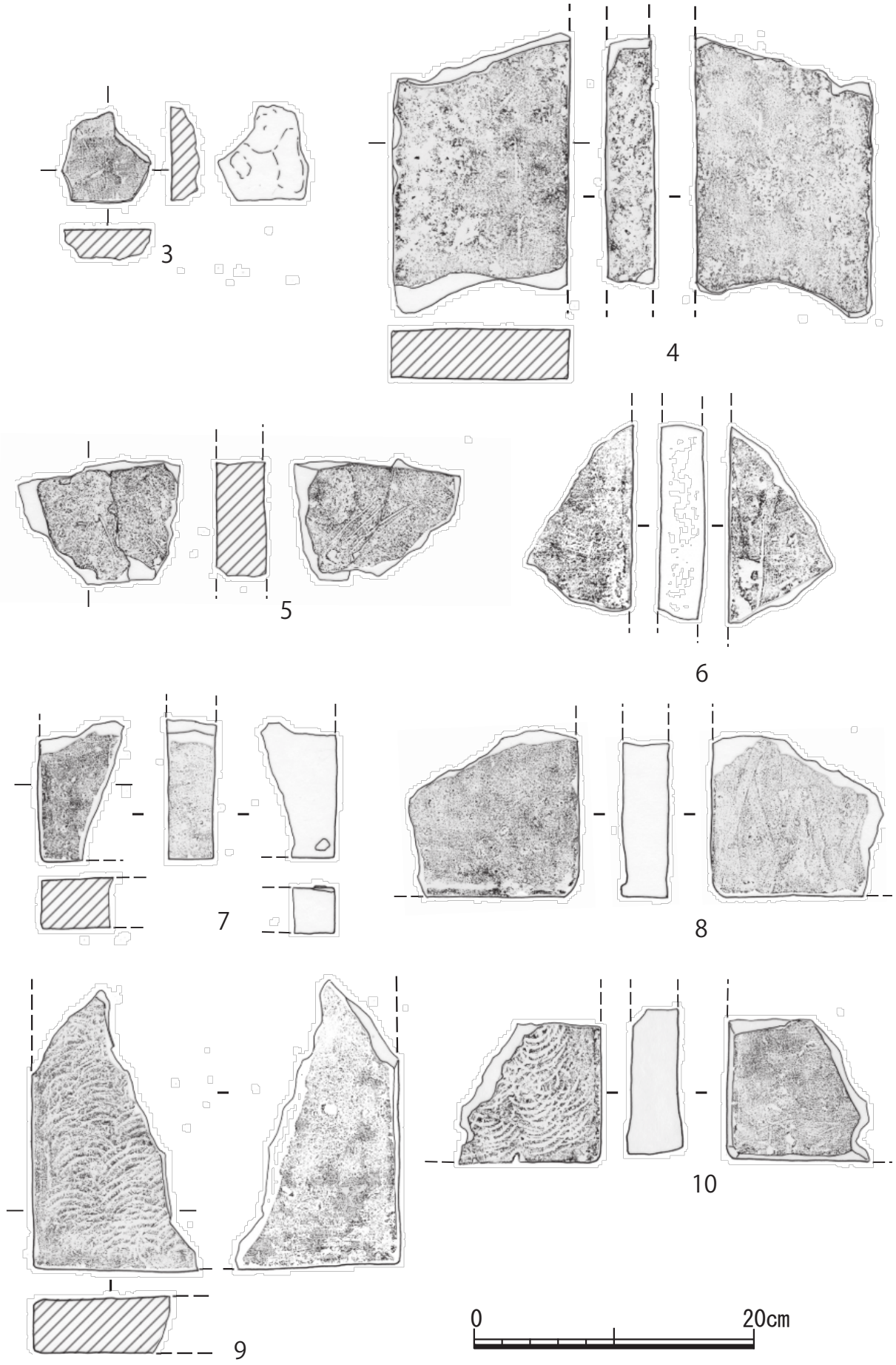

図３　初田１号墳塼（茨木市立文化財資料館蔵）

端が 4.0cm であるが 3.4cm を計測する部分がある。灰色を呈する須恵質に焼成される。塼は、外面調整は、A面はナデを施す。B面は青海波の当具を施す。側面ナデによる調整である。

以上、観察しえた塼 10 点は大小があるもののすべて破片である。幅を計測できた塼１と塼２は大阪府教育委員会の調査で出土した資料と近似した数値であり、報告書に掲載されている塼を参考にすると長さは 50cm 前後である。したがって、塼１は完形の塼の 50％、塼２は 60％の遺存度である。

今回確認できた外面調整はナデを用いる例が多く、そのほか塼６はヘラ削り、塼９と塼 10 には同心円文とナデが認められた。塼９、塼 10 とも叩きを施す面の反対面はナデ調整を施していた。側面の調整については、ナデとヘラ削りの二者が存在する。後者の例が多く用いられている。

焼成は土師質と須恵質との二者がある。須恵質の方が６点と数の上では多いが、焼成がどちらかに偏る傾向は示せない。塼８の一側面と両面の３面に光沢のある釉薬が確認できたので、施釉塼の可能性もある。

線刻も何点かの破片に認められたが、破片であるため全体像はわからない。大阪教育委員会蔵の資料に見られた「三」字状の線刻は塼３に共通するが、「U」字状や「フ」字状の線刻は認められなかった。

写真１

写真２

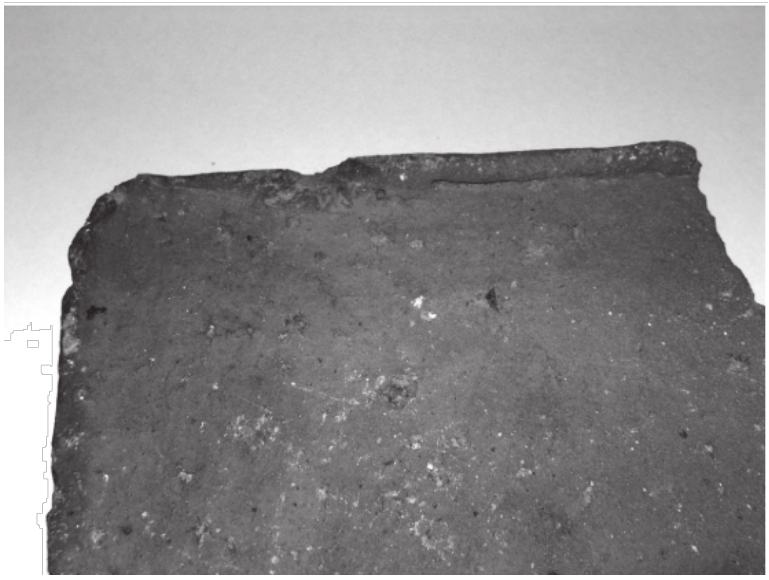

写真３

【阿武山古墳】

紹介する阿武山古墳の塼は、筆者が平成28年９月に学校教材の考古模型を調べるために大阪大学総合学術博物館に収蔵されている旧浪速高等学校の資料を調べていたところ、埴輪や鏡などの模型とともに塼が１点含まれていることに気が付いた（写真４）。

実見したところ塼の片面に「昭和九年四月廿八日　三島郡阿武村　阿武山帝大地震　研究所後山出土　石槨屋根使用」（写真５）と墨書されていた。阿武山で古墳が発見されたのは昭和９年（1934）４月22日のこと、墨書にある日付の６日前だ。梅原末治氏の『阿武山古墳』によれば28日は何も書かれていない（梅原1936）。来歴を追跡する課題が残っている。

今回資料紹介する塼は、１箇所の隅部が残る破片であるが計測し得た数値から長側、短側を判断できなかった。ここでの数値は、残存部で計測値である。長辺は19.7cm、短辺は17.8cm、厚さ3.5cm～3.7cmを測る。

焼成については瓦質に近く、全体に軟質である。胎土は緻密で、色調は黒褐色で断面は灰赤色を呈している。

塼の両面には同心円の当具痕が、折り重なって見られる。便宜上、図４に提示した実測図の右がＡ面、左をＢ面とした。

Ａ面の左端に１cm幅で同心円文がナデ調整により消されているのが観察できる。前面に同心円文を施した後に下半部のみ粗い条痕が横方向に認められた。Ｂ面は墨書のある面で、Ａ面同様に前面同心円文を施している。同心円文がＡ面に比べ原体が確認しづらいほど密接に幾度にもわたって叩く様子が窺える。下端に１cm幅のナデ調整が施される。側辺に平行するように縦方向の線刻が見られるが、幅が異なり直線でも無いので、並べる際の基準線なのか、整形時に規格性を保つための

写真４　阿武山古墳出土塼Ａ面

写真５　阿武山古墳出土塼Ｂ面

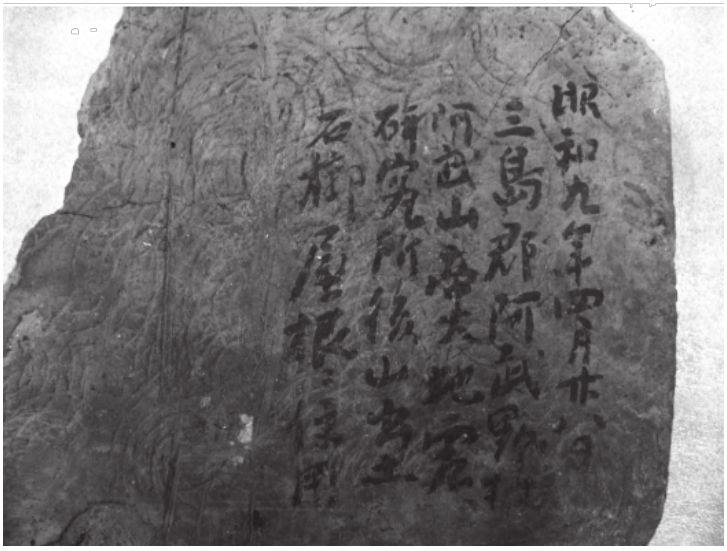

写真６　　塼墨書

線なのか明らかなことはわからない。阿武山古墳出土の塼は現在京都大学に６点、高槻市教育委員会に２点、茨木市の総持寺に１点が保管されている（註６）。梅原末治氏によると、棺台に用いられた塼は、長さ 28.8 ㎝、幅 24.2 ㎝、厚さ 3.6 ㎝で正方形に近く、塼葺きに使用された塼は長さ 51.5 ㎝、幅 25.5 ㎝の長方形であったことが記されている（梅原 1936）。京都大学に残る唯一完形の１点は幅 25.6 ㎝、長さ 51.5 ㎝、厚さ 3.8 ㎝を測り、この規格は上記報告から塼葺きに使用された塼と一致する（今西 2012a）。京都大学が所蔵している塼に須恵質があり、破片ではあるが２種類の同心円文の当具痕が確認されている。便宜上、図４左上に示したとおり、芯の直径７㎝前後の正円に近い同心円文の当具痕跡を甲類と芯の直径５㎝前後の長楕円形を呈する当具の痕跡を乙類とした。大阪大学総合学術博物館の塼の当具痕を京都大学の塼と比較すると当具痕甲類となる。須恵質ではないが、大阪大学総合学術博物館の塼は生焼けの製品と理解したい。

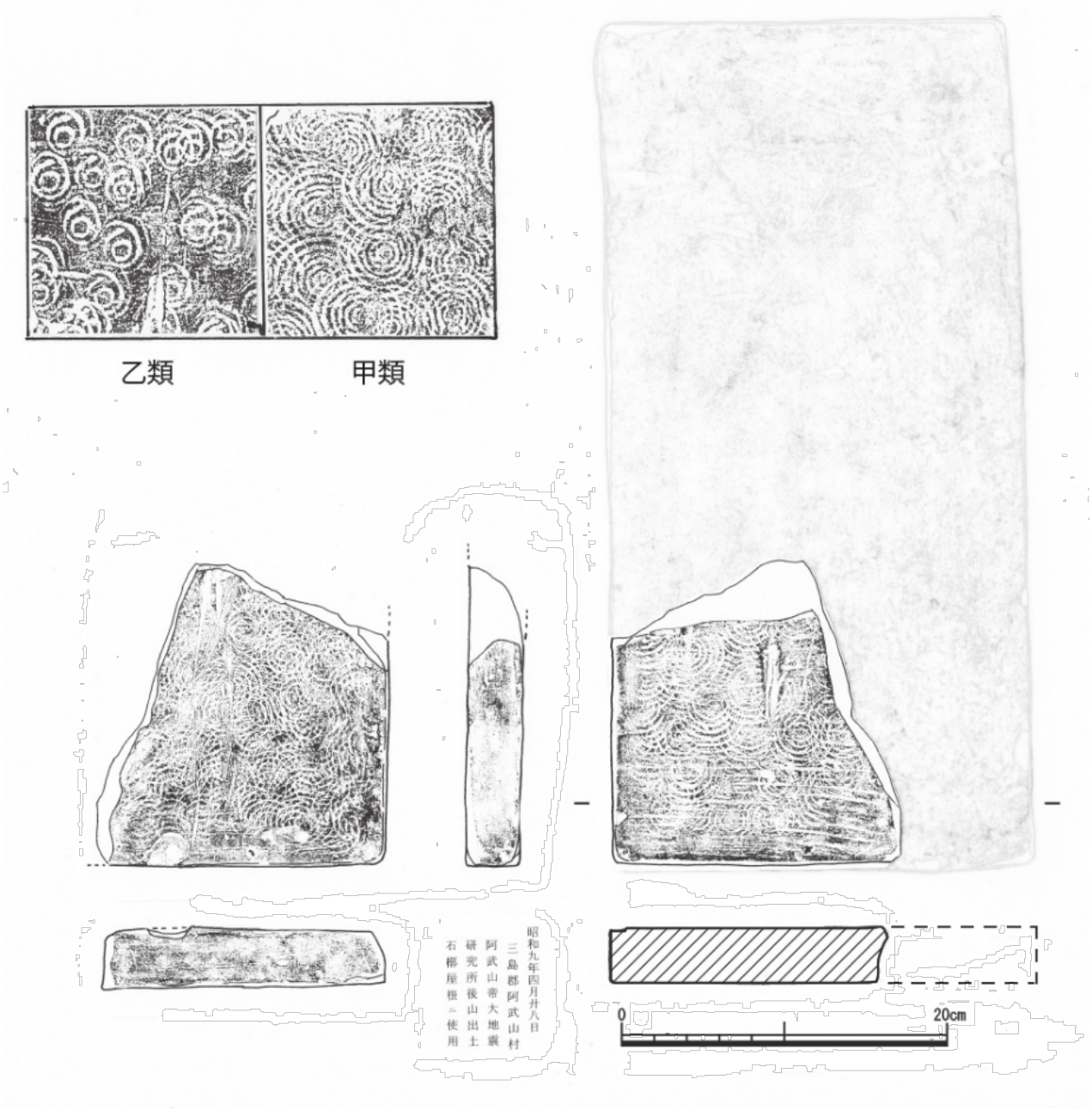

図４　阿武山古墳塼（大阪大学総合学術博物館蔵）

３．安威地域の塼について

以上､初田１号墳と阿武山古墳の塼を紹介した。次に安威川を挟んで指呼の距離にある両古墳の塼と桑原西古墳群で検出された竪穴式小石室から出土した塼（小川 2008）について検討し、安威地域の塼を見てみる。

【法量】

梅原報告にある棺台用と塼葺きに使用された規格の違う二つ塼は、阿武山古墳以外では確実な棺台用塼はない。今のところ長さ 52cm 前後、幅 26cm 前後、厚さ４cm 前後の長方形規格の塼が多く見られる（図５－①、②、④、⑤)。破片資料の中には阿武山古墳や初田１号墳（図５－③）や桑原西古墳群の竪穴式小石室出土の塼に短辺が 27 cmを超える資料はあるが、数は少ない。

【調整】

同心円文叩き痕をナデかヘラケズリにより叩き痕跡を消す調整が確認できる（図５－①)。したがって同心円文叩き痕跡の認められる塼については、調整を施さない一群の塼として捉えることができる。この差については、併用している阿武山古墳の例から製作工人の手順の違いと認識している。また、桑原西古墳群の竪穴式小石室からはケズリ調整を施す塼が多用されていたが、古墳に伴わない塼の中に同心円文叩き痕が同じ遺跡で見られたことから供給にも偏向が無いと推考する。

法量や調整から安威地域の塼の特徴をみたが、限られた資料であるのは否めない。ただ、安威地域に塼が使用される経緯は阿武山古墳の造営が深く関与しているには間違いはなかろう。それは、阿武山古墳で見られた横口式石槨を覆う一次盛土の表面や石槨上部の積み上げ、さらに棺台に使われている塼の使用量が、初田１号墳や桑原西古墳群と比べようもないほど多いことから思慮される。指摘されているように余剰品が阿武山古墳周辺に供給された可能性が高いと思われる（図５)。

４．まとめにかえて

今まで知られていなかった初田１号墳と阿武山古墳の塼を図化し、概要を紹介した。何れも過去に報告されている塼と類似するもので新たな見解はなかった。

今回紹介した塼は、鍋島隆宏氏が「南河内型同心円文塼」と称した南河内に見られる須恵質の同

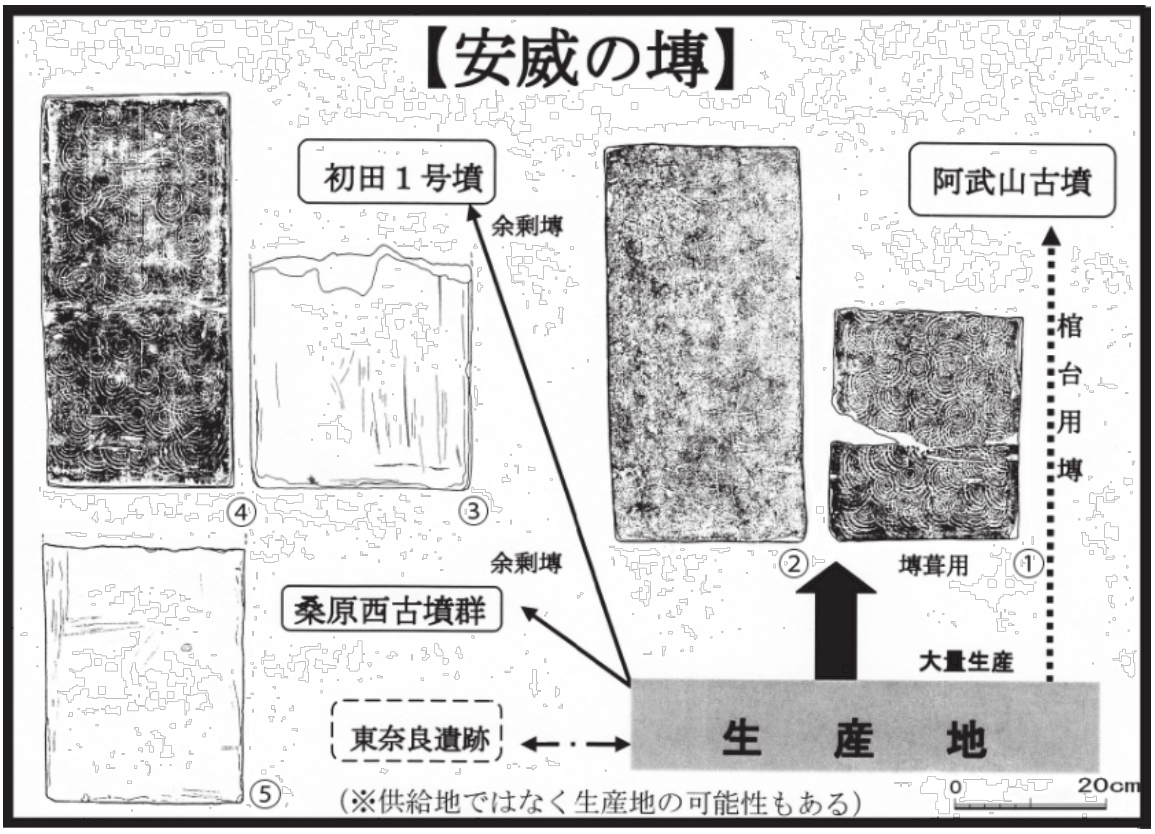

図５　安威の塼

心円文叩きの塼と施文方法や規格が南河内型とは異なり、北摂地域に一つの類型を考えられている（鍋島 1998）。一つの類型を、今西氏は「北摂型」と呼称し、阿武山古墳築造時の塼の余剰品が周辺の古墳に供給した可能性を考えられた（今西 2012b）。また、菱田哲郎氏は、茨木市の東奈良遺跡から出土した須恵質の同心円文の塼に注目され、同様な塼を「三島型」とした（菱田 2014）。

私は古墳に使用された塼として捉えたので、提示した塼は安威川を挟んだ小範囲で分布するので「安威モデル」とする。

安威モデルの生産は、阿武山の南山麓に築造された阿武山古墳が契機となったと考えた。棺台や石槨を覆うために大量の塼が必要となったのである。その生産の開始は、阿武山古墳から出土した須恵器から７世紀第２四半期と考える。

阿武山古墳の築造からさほど時を経ることなく初田１号墳や桑原西古墳群が造営された。石室に僅かに使った塼は、安威モデルであり、その供給にあたっては阿武山古墳の塼の余剰品を初田１号墳や桑原西古墳群に葬られた集団に与えた可能性がある。

註

１）地名辞典によると「安威」以外にも阿為、安井、藍井、阿井とも書かれる。安威川上流右岸、茨木川中流左岸に位置する。

２）見学に際して大阪大学埋蔵文化財調査室の中久保辰夫氏、大阪大学総合学術博物館の横田宏助教にお世話になった。

３）清水邦彦氏にご配慮を得た。

４）清水邦彦氏にご教示を得た。

５）第１回目は平成６年 11 月 11 日に塼１、塼２、塼５、塼６。第２回目は平成 25 年８月に塼３、 塼４、塼７～塼 10 が該当する。塼は昭和 35 年９月に表採されている。

６）総持寺は阿武山古墳出土と考えられている。阿武山古墳の塼については、鍋島氏の報告（鍋島 2000）に南面排水溝以外に墳頂部北側より１点採集されている記述があり、中村氏の報告（中村 1998）に図が掲載されている。

参考文献（五十音順）

今西康宏 2012a『阿武山古墳と牽牛子塚 - 飛鳥を生きた貴人たち - 』

今西康宏 2012b「阿武山古墳の再検討 - 漆塗棺を中心に - 」（龍谷大学考古学談話会レジュメ）

梅原末治 1936『摂津阿武山古墓調査報告』大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告第７輯

小川裕見子 2008「第４節　竪穴式小石室及び出土塼」『桑原遺跡 - 安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査 - 』大阪府教育委員会　pp. 30-35

奥村茂輝 1999「総持寺所蔵・伝阿武山古墳出土塼」『古代文化』第 51 巻　第６号　財団法人古代学協会　pp. 47-48

清水邦彦 2014「古墳時代の塼」『茨木に眠る資料－免山篤コレクションを中心に－』展示図録（茨木市立文化財資料館）pp. 17-18

関　真一 2007「第２節　初田１号墳と出土塼」『陶器山・陶器千塚・陶器南遺跡 - 府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う』 大阪府教育委員会　pp. 245-252

高橋照彦 2004「阿武山古墳小考 - 鎌足墓の比定をめぐって - 」『待兼山論叢』第 38 号　pp. 1-25

中井貞夫 1972「初田第１号古墳調査概要」『節・香・仙　第９号』大阪府教育委員会　pp. 1-5

中村浩 1998「阿武山古墳の被葬者について」『古代文化』第 50 巻第６号　財団法人古代学協会　pp. 42-53

鍋島隆宏 2000「仏陀寺古墳出土の塼について」『館報第６号　平成 11 年度』太子町立竹内街道歴史資料館　pp. 63-97

花谷浩 2001「土器と塼・瓦の話」『奈良文化財研究所紀要 2001』奈良文化財研究所　pp. 30-31

菱田哲郎 2014「茨木に眠る資料から～東奈良遺跡出土塼をめぐって～」『中臣鎌足と三島別業』（発表レジメ）

森田克行 1983「Ⅶ　阿武山古墳」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・７』 高槻市教育委員会　pp. 22-25